

- 1 佐保姫が寄席に入つて来りしよ
- 2 うだうだと楽しき梅の茶店かな
- 3 盆梅を鳴雪翁と名付けんや
- 4 うっかりや鶯笛を忘れたる
- 5 紙箱に鶯餅やちよんちよんと
- 6 先頭が八田木枯鶴帰る
- 7 鶴引くや八田木枯なら光る
- 8 鶯笛に先生の死を言ひ聞かず
- 9 夕べからぼろぼろ泣くよ鶯笛
- 10 天上へ鶯笛は届くかな
- 11 君に貸す本の多さよ椎若葉
- 12 百日紅用の無き日も訪ね来よ
- 13 月光へ再び鮎を返しけり
- 14 いつまでも死なぬ金魚と思ひしが
- 15 かたつむり大きくなつてゆく嘘よ
- 16 玉葱を疑つてゐる赤ん坊
- 17 花石榴父のお客はみな怖し
- 18 落鮎や大きな月を感じつつ
- 19 すぐそこが見えざる夜や下り鮎
- 20 よろよろや松の手入に口出して
- 21 草城忌水玉もまた男傘
- 22 松島におぼろの島の二百ほど
- 23 凧やうどんがぼんと明るくて
- 24 鎌倉に来て不確かな夜着の中
- 25 仏壇の大きく黒し狩の宿
- 26 手をついて針よと探す冬至かな
- 27 冬至の日墨で描かれし人動く
- 28 墨汁が大河のごとし蕪村の忌
- 29 玉子酒持つて廊下が細長し
- 30 永き日やうしろの人のテーブルも
- 31 蜘蛛が来てささつと食べてゆきしもの
- 32 蛞蝓の上から剥がれ落ちにけり
- 33 蠅捕器雨の熱海に来てみれば
- 34 梅雨茸が怖い煙を吐きにけり
- 35 どの部屋に行つても暇や夏休み
- 36 炎天といふ天井がぐいぐいと
- 37 俊寛に鯉が釣れてよき日かな
- 38 安心の馬にもありて肥えにけり
- 39 爽やかな空振りを積み重ねけり
- 40 ばつたんこ手紙出さぬしちつとも来ぬ
- 41 へうたんの中より手紙届きけり
- 42 へうたんの中に見事な山河あり
- 43 へうたんの中へ再び帰らんと
- 44 困るほど生姜をもらひ困りけり
- 45 秋惜しむ鬘屋の店を増やしつつ
- 46 黄金の寒鯉がまたやる気なし
- 47 冬の蠅怠けても良き時間あり
- 48 人知れず冬の淡海を飲み干さん
- 49 凍鶴がほどけて泣くよ勘三郎
- 50 ぜんざいやふくら雀がすぐそこに

- 75 鈴虫を上から覗く十二匹
- 74 ぶらついて団扇に秋の来りけり
- 73 若竹の北鎌倉も雨ならん
- 72 掛軸の山河が遠し夕蛙
- 71 鱒食ふ五つの寺をはしごして
- 70 冬ごもり鶉に心許しつつ
- 69 鶴折つて日本の鶴を増やさんと
- 68 虫がゐて冬の椿とありにけり
- 67 すぐそこの河豚宿にして見つからず
- 66 美しきものを食べたし冬椿
- 65 海老曲がる母の天ぷら秋の雨
- 64 絵が好きで一人も好きや鳳仙花
- 63 秋風や大きな鯉のゐる暮らし
- 62 旅浴衣ここにも稻荷神社かな
- 61 へうたんの中に無限の冷し酒
- 60 冷酒を墨の山河へ取りに行く
- 59 東をどり遊びの尽きぬ人ばかり
- 58 ことごとく平家を逃す桜かな
- 57 光合ふ三面鏡や鶴帰る
- 56 ひさごからこぼるる鶴や井月忌
- 55 てふてふと書いては翔ばす井月忌
- 54 燕来る縦に大きな信濃かな
- 53 紙きりの鉄が長し春動く
- 52 白魚を吸ひたき頃となりにけり
- 51 お雑煮のお餅ぬーんと伸ばし食ふ
- 76 虫の闇伸びたり少し縮んだり
- 77 馬追に大きな影や斜め下
- 78 鈴虫の籠に入つて遊ぶもの
- 79 蟹動くどの白露もこぼさず
- 80 むかうとはあふみの向かう冬すすき
- 81 嫁がゐて四月で全く言ふ事なし
- 82 鉄斎の春の屏風に住み着かん
- 83 花曇り釣る気持少なき釣をして
- 84 エンジンの大きな蛇が来りけり
- 85 涼しくていつしか横に並びけり
- 86 流星を見てトラックは次の街
- 87 冬帽や君昔から同じかほ
- 88 坂の町尾道の子へお年玉
- 89 初氷あちこち猫のゐる街に
- 90 途中まで鶴と一緒に帰りけり
- 91 昼酒が心から好きいぬめぐり
- 92 この国の風船をみな解き放て
- 93 東京を離れずに見る桜かな
- 94 雀の子雀の好きな君とゐて
- 95 それぞれの悩み小さく鯊を釣る
- 96 唐へ行く大きな船や籠枕
- 97 陶枕は憶良にねだるつもりなり
- 98 こぼさずにこぼるるほどに冷し酒
- 99 雨もまた良しうなぎ屋の二階より
- 100 秋蟬や死ぬかも知れぬ二日酔ひ